

# アレルギー性疾患に関する3歳児全都調査 (平成16年度)

## 概要



# 「アレルギー性疾患に関する3歳児全都調査(平成16年度)」 概要

## 1 調査目的

アレルギー性疾患の現状及び前回調査(平成11年度)からの罹患状況の推移をみるとともに、都民のニーズも合わせて把握し、今後のアレルギー性疾患対策の基礎資料とする。

## 2 対象と方法

### (1) 対象

都内の3歳児のうち平成16年9月に区市町村で実施された3歳児健康診査の受診対象者及びその保護者で、対象者数8,294人、有効回答数4,305(51.9%)であった。

### (2) 方法

各区市町村に協力を依頼し、無記名による自記式調査票を配布し、回収を行った。

### (3) 項目

- ① 基本属性(性別、住所地、出生順位)
- ② アレルギー性疾患の状況(ぜん息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、じんましん、その他のアレルギー性疾患)
- ③ 生活環境及び生活習慣(同居人の喫煙状況、保育園等への通園状況、寝室の床の材質、掃除の頻度等)
- ④ アレルギー性疾患に対する意見・要望

## 3 調査結果

### (1) 対象者の概要

有効回答数4,305人の内訳は、地区別では、23区2,782人、多摩地域1,492人、島しょ17人、性別では男2,233人、女2,072人であった。

### (2) アレルギー性疾患の状況

- ① これまでに何らかのアレルギー性疾患の症状があった者の割合は、回答者全体の51.5%であり、医師の診断(以下「診断」とする。)を受けた者は、36.7%であった。
- ② 各疾患別の症状をみると、アトピー性皮膚炎、ぜん息・ぜん鳴が、それぞれ20.5%、19.4%と多い。診断については、アトピー性皮膚炎は15.3%、ぜん息は10.5%だった。
- ③ 前回の調査(平成11年度)と比べ、何らかのアレルギー症状のあった者の割合は増加している。各疾患の症状については、食物アレルギー、アレルギー性鼻炎が大幅に増えている。ぜん息・ぜん鳴については、前回と質問文が異なるため単純比較はできない。
- ④ 診断については、前回の調査と比べ、ぜん息、食物アレルギー、アレルギー性鼻炎が増加している。何らかのアレルギー性疾患の診断を受けた者の割合はほとんど変わらない。

表1 何らかのアレルギー性疾患の罹患状況

		症状あり	診断あり
何らかの アレルギー	1999年	41.9%	36.8%
	2004年	51.5%	36.7%

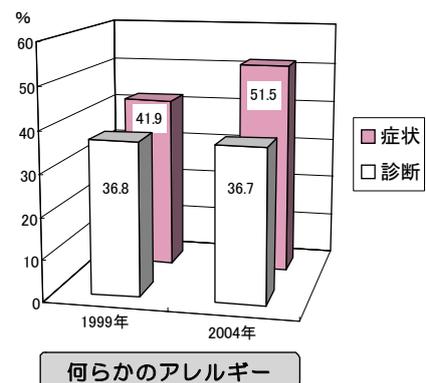


表2 各アレルギー性疾患の罹患状況の推移

	症状あり		診断あり	
	1999年	2004年	1999年	2004年
ぜん息・ぜん鳴	9.5%	19.4%	7.9%	10.5%
食物アレルギー	9.4%	15.6%	7.1%	8.5%
アトピー性皮膚炎	18.0%	20.5%	16.6%	15.3%
アレルギー性鼻炎（花粉症を含む）	7.5%	14.6%	6.1%	9.2%
アレルギー性結膜炎（花粉症を含む）	5.1%	6.9%	4.6%	4.5%
じんましん	15.0%	17.1%	11.9%	8.7%
その他のアレルギー性疾患	3.7%	3.8%	3.0%	2.2%

ぜん息・ぜん鳴における症状の質問文は1999年と2004年で異なり単純比較はできない。

- ⑤ 高い頻度でアレルギー性疾患同士の併発が認められた。
- ⑥ アレルギー性疾患の診断を受けた者の親は、同じアレルギー性疾患に高頻度で罹患していた。
- ⑦ 食物アレルギーについては、以下の結果であった。
  - ・男児が女児に比べ、症状と診断の割合が高かった。地域差は特に認めなかった。
  - ・症状のあった者のうち64.7%が1歳までに発症しており、診断のあった者のうち70.7%が1歳までに診断を受けていた。
  - ・原因食物としては、卵が最も多く、次いで牛乳であり、前回調査と同様の結果だった。
  - ・出現した症状としては、皮膚の湿疹の割合が前回と同様に高かった。
  - ・現在、食物の制限・除去を行っている者は、症状がある者で37.6%、診断を受けている者で49.3%であった。現在または過去に制限・除去をした者のうち4割弱が、診断を受けずに症状のみで食物の制限・除去を行っていた。
- ⑧ ぜん息・ぜん鳴は、男児が女児に比べ、症状と診断の割合が高かった。地域差は特に認めなかった。
- ⑨ アトピー性皮膚炎は、男児が女児に比べ、症状と診断の割合が高かった。地域差は特に認めなかった。
- ⑩ アレルギー性鼻炎は、症状、診断とも男女差及び地域差は認めなかった。
- ⑪ アレルギー性結膜炎の症状と診断は、男女差は特にないが、地区で見ると、診断で23区が多摩地域より高かった。

### (3) 生活環境及び生活習慣

- ① 同居人の喫煙状況としては、「吸わない」が45.8%と最も高かった。前回調査と比べ、「吸う」割合は減少した。ぜん息・ぜん鳴、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎の症状をもつ者の約4分の1の家庭において、同居人が子どもの前でも喫煙していた。
- ② 保育園・幼稚園への通園状況は、約3分の1が通園しており、そのうちの57.8%に何らかのアレルギー性疾患の症状があった。
- ③ 生後3か月までの授乳方法は、食物アレルギー又はアトピー性皮膚炎の症状のあった者において、前回調査同様、母乳による有意差がみられたが、授乳方法とアレルギー性疾患の発症との関係は明確ではない。
- ④ 寝室の床の掃除頻度、寝具の天日干しまたは布団乾燥機かけの頻度、室内の定期的な換気、家の造り、ペットの飼育状況とアレルギー性疾患との関連は、今回は特にみられなかった。

#### (4) アレルギーに関する意見・要望

アレルギー症状の有無にかかわらず、「薬や治療法について知りたい」「室内の環境について知りたい」「専門医療機関を知りたい」「スキンケアについて知りたい」など、アレルギーの情報・正しい知識を求める意見が多かった。

その理由として、「薬の副作用が心配」「診断・対応などの方針が統一されていない」などのほか、現在症状がない者からも「いつか発症するかもしれない」「情報が多すぎる・曖昧」などの意見があげられた。

#### 4 まとめ

今回の調査では、3歳までに何らかのアレルギーの症状があった者が回答者全体の51.5%に上り、医師の診断を受けた者が回答者全体の36.7%であった。前回の調査と比較すると、症状があった者の割合は約10ポイント増加していた。

各疾患別では、すべての疾患で症状があった者の割合が増加しており、特に食物アレルギー、アレルギー性鼻炎で症状があった者の割合が大きく増加している。

食物アレルギーについては、症状を起こしたことがある者が15.6%、診断を受けた者が8.5%で、症状が約1.7倍、診断が約1.2倍増加していた。食物アレルギーの症状を起こしたことがある者のうち、8割以上が現在または過去に食事制限・除去を行ったことがあったが、そのうち診断を受けていない者が4割弱おり、自己判断によると思われる食事制限・除去が高頻度に行われていることが明らかになった。

生活習慣においては、子どもにぜん息・ぜん鳴、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎の症状があるにもかかわらず、同居人が子どもの前で喫煙している家庭が約4分の1存在した。

保育施設等の利用については、回答者全体の30.3%が通園しており、そのうちの57.8%に何らかのアレルギー性疾患の症状があったことから、家庭でのケアに加え、保育・教育施設においても家庭と連携してケアに協力することが重要と言える。

ニーズ調査からは、アレルギー症状の有無に関わらず、アレルギーについての知識・情報を得たいという要望が多いことが明らかになった。

本調査の結果、何らかのアレルギーの症状のあった者が半数を超えていることから、現在症状がない者も含め幅広い対象への普及啓発に取り組むことが重要と言える。また、患者・家族の自己管理技術の向上と適切な医療の継続のための相談・支援活動の充実や、地域関係機関の連携の強化など、さまざまな角度から総合的なアレルギー性疾患対策を推進していくことが重要である。

